

オンライン教育での学級担任の役割

ー 新型コロナウイルス禍の生徒の人間関係の現状から ー

学校力開発分野 (19220915) 佐藤 公 大

本研究の目的は、休校中の生徒の人間関係の現状を把握することから、オンライン教育における学級担任の役割を考察することである。休校中の生徒の関わりが、限定的だったこと、休校中の教師の生徒に対する関わりが不十分だったことが分かった。そこから、オンライン学活の実践をしたところ、オンライン学活の設定の必要性、生徒の人間関係作りを促進させる必要性が明らかになった。

[キーワード] オンライン教育, 中学校, 学級, 学級担任

1 はじめに

(1) 問題の所在と課題

文部科学省は、2020 年 2 月 28 日「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」の通知を発出した。4 月 7 日に緊急事態宣言、5 月 25 日にその解除宣言が行われた。その間、全国約 99%の学校が臨時休校となった。

その後、感染状況により地域ごとに順次、新学期が始まった。分散登校という形で学校が再開されたものの、生徒は自宅待機を余儀なくされた。

このような状況下で起きたことは 3 つある。1 つ目は、生徒は学校に登校せず、自宅で学習を自主的に進めなければならない状況となったことである。2 つ目は、教師が家庭への電話連絡や学習課題の提示を行ったことである。3 つ目は、GIGA スクール構想の「一人一台の PC」のオンライン教育が本格的に推進されるようになったことである。中原(2020)は「オンライン授業の学習効果は、対面授業よりも高い、ないし同値」としている。だが、多くの教師は、オンライン教育に戸惑うこととなった。担任教師は、公平性を保とうとして、生徒に対して、課題の提示、電話連絡等しかできず、オンライン教育における担任教師の役割について、疑問を残す形となった。

このように、ポストコロナという状況は、学級経営にも新たな課題と可能性を示した。学習指導要領(平成 29 年 3 月告示)第 1 章総則は、学級経営の充実について次のように記している。「学習や生活の基盤として、教師と生徒との信頼関係及び生徒

相互のよりよい人間関係を育てるため、日ごろから学級経営の充実を図ること」。この学級経営の充実には、「教師と子どもの信頼関係の構築」と「子ども同士の良好な関係づくり」の二つの面がある。

これまで、学校という場所は、一斉授業を前提とし、全員に登校することで学習や活動を行う場として機能してきた。しかし、コロナ禍では、そうした学級経営の前提が、機能しない状況が生まれたのである。一方、不登校であったり、別室登校であったりした生徒がオンライン授業を通じて、学校にアクセスできるようになったという事実がある。学級という場所に一斉に生徒を集めて、学級経営を行うことを前提としなくても良い可能性が生まれたことを意味する。生徒一人ひとりの考え方やペースに合わせて学級経営を考えなければいけない状況となったと言える。このポストコロナの状況でオンライン教育における学級担任の役割や学級経営に関する研究は、未だ十分とは言えない。

(2) 先行研究の検討

苦野(2020)は、積極的に生徒同士が関わるのが難しいコロナ・ショックの時期だからこそ「ゆるやかな協同性」の必要性を指摘している。コロナ期には、多くの学校では、「みんなで、同じことを同じペースで」行うことが不可能となった。中には、友だちとの関係を保つことが難しく孤立したような生徒もいた。一人ひとりが個別に学習することが、孤立化したバラバラな学びになってはいけない。そこでは、「ゆるやかな協同性」という新たなつながりの形が問われていると苦野は指摘している。

オンライン教育を行った時、学級担任は生徒同士が必要に応じて関わることができる仕組みづくりまではカバーできていなかったと考える。そして、これらは、中原(2020)が、「教育機関の在り方は、学び・知識・スキルの提示や伝達だけでないこと」や「学校には、居場所やつながり、安心感を持たせる意味があり、学校の果たしてきた役割や機能が多かった」と述べていることにも通じている。オンライン授業で教育効果は、対面授業と大きな差異は感じられないものの、子どもの学びという面では、学校のもつ役割や機能を再確認する契機となった。

出口(2020)は教育におけるピア・ラーニング(Peer：仲間)の重要性を指摘している。しかし、休校中、分散登校中に生徒同士が進んで関わることは困難な状況にあった。休校中のオンライン教育では、不安を解消したり、励ましあったりすることが、難しいとしている。以上の記述から、オンライン教育の中で学習を進めたり、生活を送ったりするためには、生徒同士のつながりが必要であると考えられる。

沢津橋(2017)は、日本で最大規模の学生を抱える通信制高等学校のN高では、Slack上での担任は「モデレーター」と位置付けられ、生徒の近況報告や自己紹介などのコミュニケーションを促す役割を担っているとしている。担任教師は、毎日、オンラインホームルームを設定し、生徒と交流を行っている。学習の進み具合を確認したり、生徒の困りごとにアドバイスを行ったりし、一人ひとりの生徒が学校生活で孤立しないように腐心している。実際に、オンライン教育において、生徒同士がつながるきっかけづくりを学級担任が担っていることの例と言える。

2 研究目的

本研究の目的は、コロナ禍の生徒の人間関係から、今後進展するオンライン教育と対面教育のハイブリット型の教育の中で変わっていく学級担任の役割について明らかにすることである。そのために、下記の4つのことに取り組み、その効果を検証する。

- (1) 生徒を対象にしたアンケートを通して休校中の生徒の人間関係の現状はどのようなものかを明らかにする。
- (2) 生徒を対象にしたアンケートとヒアリングを

通して、休校中の人間関係の現状から、生徒は何に困っていたのかを明らかにする。

- (3) 学級担任を対象にしたアンケートとヒアリングを通して、休校中の教師の生徒に対する関わりは、どのようなものかを明らかにする。
- (4) オンライン学活¹⁾の実践を通して、オンライン教育が生徒同士のつながりづくりにどのような効果を持つかを明らかにする。

3 実践と結果

(1) 生徒を対象にしたアンケート

①調査の目的

休校中の生徒の人間関係の現状を把握することを目的とし、筆者の勤務校山形県内のA中学校、教職専門実習Ⅲの実習校の山形県内B中学校の全校生徒を対象にアンケート調査を実施した。

②対象となる学校及び生徒の概要

時期：2020年8月及び9月

対象：県内A中学校 全校生徒217名の生徒

有効回答数210

県内B中学校 全校生徒439名の生徒

有効回答数396

③アンケートの概要

表1 実施したアンケート項目

	質問内容
1	臨時休業・分散登校期間中に直接、何人の友だちと会いましたか。
2	会っていた場合、直接、会った回数はどれ位ですか。
3	臨時休業・分散登校中に友だちに直接会う以外に関わった人数は何人ですか。
4	臨時休業・分散登校中にどのような関わりを持ちましたか。(複数回答)
5	臨時休業・分散登校中にどのようなことに困りましたか。(複数回答)

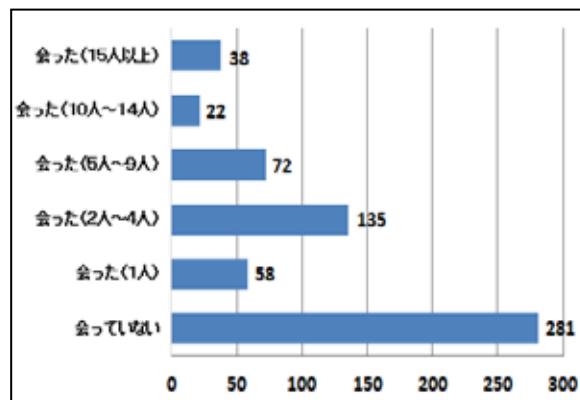


図1 臨時休業・分散登校中に友だちに会った人数

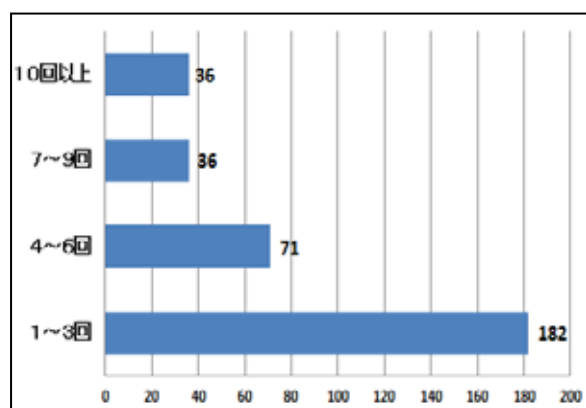


図2 臨時休業・分散登校中に友だちに会った回数

図1は、臨時休業・分散登校期間中に友だちに会ったか尋ねた結果である。直接、友だちに会った割合は54%で、反対に46%の生徒は友だちと会っていなかった。直接、友だちに会った生徒のうち約60%の生徒は会った人数が1人または、2人～4人とその人数は少ない。図2は、直接、友だちに会った回数を尋ねた結果である。55%の生徒は1～3回の少ない回数しか友だちに会っていなかった。臨時休業・分散登校期間中に友だちと直接的な関わりを持った生徒は、少ないことが分かった。では、生徒は、直接会う以外ではどのような関わりを持っていたのだろうか。

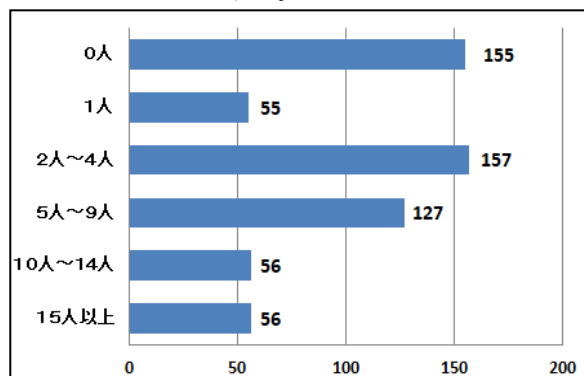


図3 臨時休業・分散登校中に友だちに直接会う以外に関わった人数

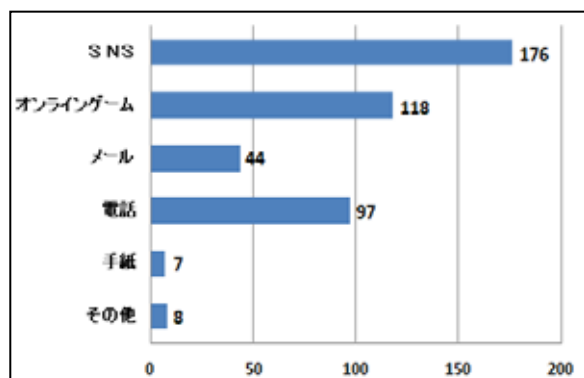


図4 臨時休業・分散登校中にどのような関わりを持ったのか

図3は臨時休業・分散登校中に友だちに直接会う以外に関わった人数である。直接会うこと以外の関わりとは、SNS やオンラインゲーム、メール、電話、手紙のやり取りを指す。図1で「まったく会っていない」と回答した281人のうち77人(25%)の生徒は、直接会うこともなかった上に、オンラインやSNS 上でもまったく関わりを持っていなかった。このような生徒は孤立化した可能性がある。反対に、残りの75%の生徒は友だちと何らかの関わりを持っていた。その関わる人数は、多くないものの、自分と関わりの深い友人とは、関わりを継続していたことが分かる。

では、生徒はどのような関わりを持っていたのか。それを示したものが図4である。図4は臨時休業分散登校中に友だちとどのような関わりを持ったのか質問したものである。最も多い40%の生徒はSNS での関わりを持っていた。さらに、22%の生徒はオンラインゲームでもつながりを持っていた。その他、関わりを持つ手段は、メールや電話など、複数にまたがっていることも分かった。

(2) 生徒を対象にしたアンケート及びヒアリング

図5は「臨時休業・分散登校中にどのようなことに困ったか」について質問したものである。休校中に「関わりを持っていた」層と「関わりを持っていなかった」層に分けて示した。

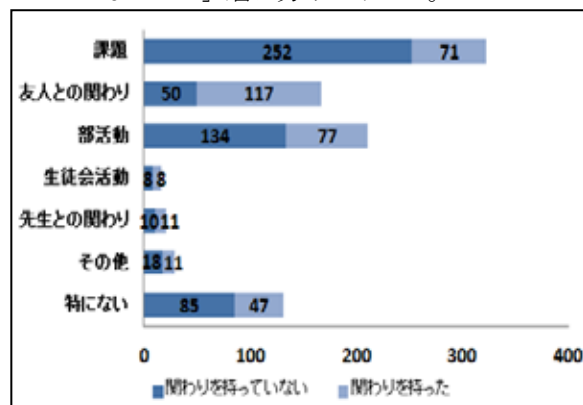


図5 臨時休業・分散登校中にどのようなことに困ったか(複数回答)

323人(53%)の生徒は学習課題に対して困り感を抱いていた。次いで211人(35%)の生徒が活動休止となっていた部活動に困っていた。さらに、167人の生徒が友人との関わりに困っていた。そのうち50人(30%)は、臨時休業・分散登校中に誰とも会わなかった上に、SNS 等で誰とも関わりを持たなかった生徒である。つまり、苦野の言う「友だちとの関係を保つことが難しく孤立したような生

徒」である。さらに、117 人(70%)の生徒は SNS やオンラインゲーム等で友だちと何らかの関わりを持っていたにも関わらず、友だちとの関係に困っていたと回答している。このような生徒は、普段から親しくしている友人の存在がある。関わる友人を自分で選択しながらも、困ったことがあると回答している。そこで、「友だちとの関係において、どのようなことに困ったのか」ヒアリングを実施した。

○学習面での困り感

- ・宿題のことを聞く時などは、大変だった。
- ・学校なら、直接すぐに聞けるのに、友だちに分からない勉強を教えて欲しかった。

○SNS 等のコミュニケーションの難しさ

- ・会って顔を見て、話をしていないから、相手の気持ちが読み取りづらいところがあった。
- ・自分の気持ちが、相手に伝わっているかわからないところがあった。
- ・実際に会って、話したり遊んだりしたかった。
- ・文字や声だけで、友達との関わりを持っていたので、相手の顔が見られなかったことが困った。

○新しい関わり(新入生、クラス替え等)

- ・SNS が使えていない時があったので使えていない分、友だちとの距離が離れそうで心配だった。

生徒は、SNS やオンラインゲームでつながっているにも関わらず、友人との関わりに困り感を持っていた。生徒は、SNS やオンラインゲームでつながっているものの、話題が学習や対面授業の中身になっておらず、かつ互いに気を使ってコミュニケーションが円滑にいかない事実がある。SNS は、あくまでも私的なコミュニケーションであって、公的な内容を担うことは難しいと言える。生徒は、オンラインでの少人数の関わりには不満を残し、学校に対して公的なオンライン上でのつながる場を設定することを期待していたのである。

(3) 教師を対象にしたアンケートとヒアリング

①調査の方法

休校中の教師の生徒に対する関わりはどのようなものか明らかにすることを目的とし、筆者の勤務校山形県内の A 中学校、教職専門実習Ⅲの実習校の山形県内 B 中学校の担任教師を対象にアンケート調査、及びヒアリングを実施した。

②対象となる学校及び生徒の概要

時期:2020 年 8 月及び 9 月

対象:県内 A 中学校 担任教師 11 名

県内 B 中学校 担任教師 14 名

③アンケートの概要

本研究では、休校中、担任教師として実践したこと、生徒の様子からオンライン教育の中で担任として何が必要かヒアリングを実施した。

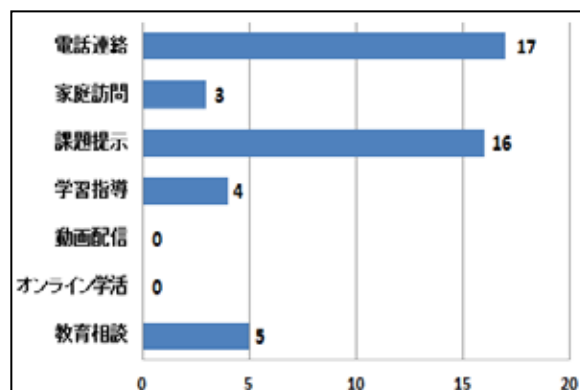


図6 臨時休業・分散登校中に担任教師として実践したこと

図6は、臨時休業・分散登校期間中に担任教師として実践したことである。約70%の担任教師は、生徒に対して電話連絡と課題提示を行った。その他、少数であるが必要に応じて家庭訪問、学習指導、教育相談を実施した。しかし、動画配信やオンライン学活を実施した担任教師はいなかった。そこで、担任教師に「休校期間・分散登校期間のオンライン教育の下で担任教師が果たす役割にはどのようなことがあると良かったか」の内容で、ヒアリングを実施した。

○生徒同士の関係作り

- ・家庭にいながら、生徒同士がつながる環境づくりを担当が担うことは必要だった。各家庭に電話をするだけでなく、互いに顔を見て話せたほうがよかったと思う。特に1年生は、環境が変わったところだったので。

○担任教師と生徒の関係作り

- ・3年生の担任の先生方は、担任団が全員持ち上がりで、生徒との関係ができていたので、結構電話したり、課題ができなさそうな生徒を呼んだりして対応していたようだ。1年生は本当に難しかった。担任4人が新任者、生徒と関係も築けていない時期だった。生徒同士の関係作りも必要だと思ったが、教師と生徒の関係作りも必要だと感じた。

○教育相談(個別の面談)

- ・休み明け教室に入れない生徒が出てしまった。あまりに長い休校は、やはり生徒にとってあまり好ましくなかったのではないかなと思う。生徒のケアと言う部分では、もっとできたことがあったのでは、と思う。

○生活リズム作り

- ・生活リズムをつくるために、毎日、朝の会を実施すべきだった。
- ・特に支援を必要とする生徒には、生活リズムの確認を含めた生活面へのフォローが必要だった。

担任教師へのヒアリングから休校・分散登校期間ほとんどの担任教師は生徒に対し電話連絡を行

ったり、課題の提示を行ったりしていた。しかし、家庭訪問や学習指導、動画配信、オンライン学活などは、ほとんど行われていなかった。教師へのヒアリングから、生徒同士の関係づくり、教師と生徒の関係づくり、教育相談(個別の面談)、生活リズム作りについて、それぞれ必要性があることが分かった。さらには、オンラインでも対面授業の場で行われるような生徒同士が刺激し合って、協同的に学ぶような場のデザインをする必要が生まれた。これは、オンライン学活の必要性を示唆している。

(4) オンライン学活の実践

①調査の方法

2020 年 11 月～2021 年 1 月に筆者の勤務校山形県内の A 中学校、1 年生のあるクラス 23 名の生徒を対象にオンライン学活を実施した。

②ねらい及び活動内容

- 再度、臨時休校措置が起こった時に、生徒に安心感を持ってもらう。
- 教育相談や進路に関する面談ができるようにする。
- 学校や学級担任及び友だち同士の心的なつながりを持ち、信頼関係を築けるようにする。
- 生徒が健康的な生活習慣や自律的な生活を身に付けられるようにする。

指導計画	時	学習活動	接続場所
	① 11/18	0 接続の確認 1 あいさつ 2 健康観察 3 先生の話 4 クラスの時間 (生徒同士の会話) 5 終わりの言葉	1 班(教室) 2 班(集会室) 3 班(第一理科室) 4 班(第二理科室) 5 班(音楽室) A さん(会議室) 担任(職員室)
	② 12/2	0 接続の確認 1 あいさつ 2 健康観察 3 先生の話 4 クラスの時間 (好きなマンガ紹介) 5 終わりの言葉	各自、校舎内の Wifi 環境のある 教室へ移動して、 各自接続 A さん(会議室) 担任(教室)
	③ 12/16	0 接続の確認 1 あいさつ 2 健康観察 3 先生の話 4 クラスの時間 (好きなTV番組紹介) 5 終わりの言葉	各自、校舎内の Wifi 環境のある 教室へ移動して、 各自接続 A さん(会議室) 担任(教室)
	④ 1/5	0 接続の確認 1 あいさつ 2 健康観察 3 クラスの時間 (休み期間の過ごし方) 4 先生の話 5 終わりの言葉	各家庭より接続 自由参加 担任(自宅)

③実践の結果

事前調査では Zoom の存在を知っている生徒は、23 人中 3 人で、Zoom を使用したことがあるのは、1 人である。以下は、実践後の生徒の声である。

表 2 実施したアンケート項目

	質問内容
1	Zoom の使い方はどのように感じましたか。
2	3 月～5 月の新型コロナ流行における休校・分散登校期間中にオンライン学活の必要性についてどのように考えますか。
3	オンライン学活はどのようなことに有効だと思いますか。当てはまるものに 3 つまで○を付けて下さい。
4	これからも、オンライン学活を続けて欲しいですか。

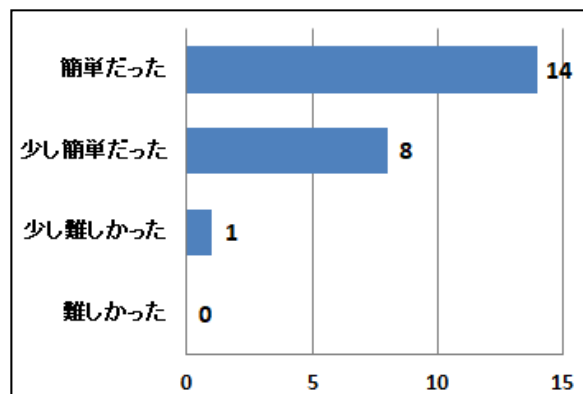


図 7 Zoom の使い方

図 7 は、オンライン学活で使用した Zoom の使い方について質問したものである。96%の生徒がその使用が「簡単だった・少し簡単だった」に回答している。操作性に特に大きな問題はなかった。

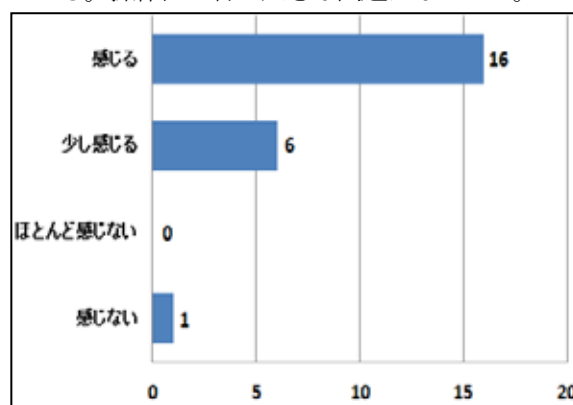


図 8 オンライン学活の必要性

図 8 は、オンライン学活の必要性について質問したものである。オンライン学活を実践して、96%の生徒は、オンライン学活の必要性を感じていることが分かった。96%の生徒がその必要性を「感じ

る/少し感じる」に回答している。対面でできていたことが、オンラインでも可能であることが分かった。そこで、オンライン学活がなぜ必要か/不必要なのかヒアリングを実施した。

○必要な理由

- ・先生が入る安心感があります。友だちだけだと LINE のやり取りと変わらないものなので。あとは、普段は全員の顔が見えないので、顔が見えていいですね。
- ・正直、休み中は生活リズムが崩れるし、休むと学校に行きたくない気持ちが出てしまいます。オンライン学活に参加したら、持ち物の確認ができ、安心できました。

○必要ない理由

- ・勉強で困ることはないので、LINE で十分かなと思います。普段から友だちと連絡を毎日のようにとっているの、オンライン学活がなくても大丈夫です。でも、みんなとオンラインで活動するのは楽しいですけど。

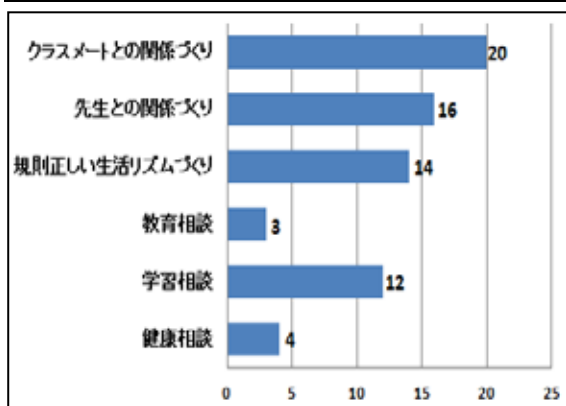


図9 オンライン学活の有効なこと

図9は、オンライン学活で有効なことは何か、生徒に質問したものである。最も多かった「クラスメートとの関係づくり」には、87%の生徒が有効であると回答している。次いで、「先生との関係づくり」には70%の生徒が「規則正しい生活リズムづくり」には60%の生徒が有効であると回答している。これらは、担任教師へのヒアリングからも分かるように、学級担任のオンライン学活の必要性と生徒が実践して感じたオンライン学活の有効なことが一致していると考えられる。

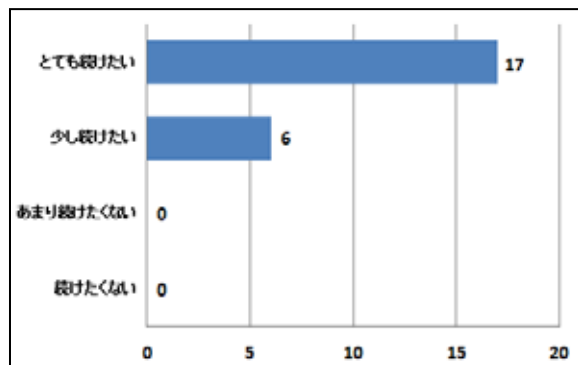


図10 オンライン学活を続けたいか

図10はオンライン学活を続けたいか質問したものである。100%の生徒が「続けたい/少し続けたい」に回答しており、オンライン学活に友好的なイメージを持っていることが分かる。以下は、オンライン学活に参加した生徒の感想である。

- ・オンライン学活で、遠い場所にいるみんなの顔を見て会話ができて新鮮でした。
- ・オンライン学活で、今までにしたことのない新鮮な体験ができて面白かったです。
- ・ズームを使って画面越しに、みんなで何かできるのは楽しかったです。特に、「好きなアニメ・マンガ」の共通点探しが面白かったです。
- ・オンラインでもみんなの顔が見られたりしたので凄くと思いました。
- ・みんな楽しそうにしていたし、面白かったです。

ほとんどの生徒は、オンライン学活で互いの顔が見える良さを実感していた。また、継続した取り組みを期待している声も多かった。

④生徒Aへの実践

生徒Aは、小学校の時から、登校しぶりをしていて、入学式と分散登校時に1回登校しただけで、それ以降は、教室には入っていない。小学校時代から自ら進んで積極的に友だちとの関わりを持たないで過ごしてきた。休校・分散登校期間中には誰とも会ったり、遊んだりせずに、連絡を取ってもいない。対人関係での不安が大きくなった状態だった。登校を渋って以降、本人と保護者と面談を繰り返して、現在(2020年10月現在)は、毎日、別室登校をしている。学校にいる間は、誰にも会わないようにして、別室で自習をして過ごしている。

オンライン学活を行うことを事前に本人に話をすると参加したいとの返事であった。オンライン学活当日は、別室で待機し、自分の顔は写らないようにしながら、クラスメートの様子を見ることができた。以下は、オンライン学活後の生徒Aの感想である。

オンライン学活をしてみたけど、同じ教室にいなくても、みんなの顔が見られるので、とても良いと思いました。特に、楽しかったのは、みんなと好きなアニメ・マンガを紹介し合ったことです。画面上で、同じアニメやマンガが好きな人がどれ位いるか探しました。同じアニメが好きな友だちがたくさんいて、話をしてみたいと思いました。これからもオンライン学活に参加したいです。

生徒Aのアンケートには、「オンライン学活をこれからも続けたい」と回答している。実践後、生徒Aは、所属する学級の生徒と毎日、顔を合わせて、挨拶を交わすようになった。さらに、交換日記をしたり、部活動の見学に行きたいと意思を表明したりし、表情も明るくなった。オンライン学活実施を

きっかけにして、前向きな変化が見られるようになった。そこで、養護教諭に「生徒Aにとって、オンライン学活の経験はどのような意味を持っていると考えるか」についてヒアリングを実施した。

- ・直接、顔を合わせたり、会話したりすることに抵抗のある生徒にとっては、対面よりも画面上のやり取りの方が抵抗が少ない。
- ・画面を見て、教室の雰囲気を感じるだけでも、友だちの様子を知ることができる。特に、教室の様子を気にしている生徒の知りたい、見たいという気持ちにとってはありがたい仕組みになっている。
- ・4月に入学して、いきなり教室に入るということは、多くの生徒が不安を感じている。このようなオンライン学活があることで、ある程度、事前に友だちの様子や友人関係、共通の話題や趣味などを知ったうえで教室に入ること、生徒にとって、安心感が生まれたり、ある程度の不安を解消したりできる。
- ・教室の中で、「自分と好きなアニメが同じだ」「同じ部活動に入部する」など自分と共通点がある人だけで、話してみたいとか関わってみたいといった気持ちになると思う。

この実践から、これまで不登校や別室登校の生徒のように学校や教室にアクセスしにくい生徒にとって、オンライン学活は、対面の直接のやり取りよりも、画面上でのやり取りの方が、参加に対するハードルが下がることが分かった。ここから、オンライン教育における新たな可能性が生まれたと言える。

4 全体考察

(1) 休校中の生徒の人間関係

休校中の生徒の人間関係がどのようなものだったか。これに対して、次の2点を指摘できる。

第1に、生徒同士のつながりは、オンラインに一部移ったことが分かった。SNS等で自分が関わりを持つ相手を選択し、関わっていた。休校中の生徒同士のつながりは、主に私的なもので、限定的であったと言える。

第2に、孤立化した生徒がいたことである。休校中に「まったく会っていない」と回答し、かつオンラインやSNS上でもまったく関わりを持っていなかった生徒が全体の13%(77人)に及んだ。孤立化した生徒は、友だちとの関係を保つことが難しくなり、個別に学習することになった。これは、居場所や安心感を与えるという学級の機能を見直す契機となったと考える。

(2) 休校中に生徒が困ったこと

休校中の生徒は、何に困っていたのか。これに対して、次の3点を指摘できる。

第1に、学習面での困り感である。生徒は、SNS等でつながっているものの話題が学習にならなかったり、すぐに教えてもらえたりする環境になかったのである。

第2に、SNS等のコミュニケーションの難しさである。互いに気を使いながら、対面よりも自分の思いが伝わりにくいと実感したことである。

第3に、新たな人間関係への不安である。SNS等でのつながりがなく、孤立化した生徒もあり、不安が高まったことである。

生徒はSNSやオンラインゲームでつながっているにも関わらず、友人との関わりに困り感を持っていた事実が見えた。オンラインでの少人数の関わりには、不満を残し、友だちとゆるやかに関わる仕組みづくりを学校に対して期待していたのである。オンライン教育の中で学習を進めたり、生活を送ったりするためには、友人とのつながりを持つことが必要不可欠であることを実感したと考える。

(3) 休校中の担任教師の生徒に対する関わり

休校中の担任教師の生徒に対する関わりの現状はどのようなものだったのか。これに対して、次の2点を指摘できる。

第1に、休校期間のオンライン教育の下で、ほとんどの担任教師が、生徒に対して行ったのは、学習課題の提示や電話連絡が中心であったことである。担任教師は、果たした役割が、不十分だったと感じていた。その果たせなかった役割とは、生徒同士の関係作り、教師と生徒の関係作り、個別の面談である。

第2に、オンライン学活を実施しなかったことである。教育相談や生活に関わること、生徒同士の関係づくり、教師と生徒の関係づくりについて、それぞれ必要性を認識しながらも環境が整わないことや公平性を保とうとして、オンライン学活を実施するまでに至らなかった。しかし、休校中に孤立化した生徒がいたことやSNS等では、公的な内容を扱うことができなかった現状から、必要に応じて関わる仕組みづくりが必要だったことが見えた。これは、中原の言う「教育機関の在り方は、学び・知識・スキルの提示や伝達だけでなく学校には、居場所やつながり、安心感を持たせる意味があり、学校の果たしてきた役割や機能が多かった」の捉えに近いことを意味している。これは、生徒の人間関係づくりを担保するオンライン学活の必要性を示唆している。

(4) オンライン学活の実践

オンライン学活の実践の結果から、生徒同士のつながりづくりについて、次の3点を指摘できる。

第1に、オンライン学活は、「関わったことがある」というゆるやかな協同性を生むきっかけになった。クラスメートの顔や表情を見ながら会話することで人間関係作りに役立つと考える。普段、生徒は、教室の中で極めて固定的な人間関係で過ごし、その関わりはかなり限定的である。オンライン学活は、その関わったことがある人数を増やすきっかけとなるものである。

第2に、生徒Aのように不登校・別室登校の生徒にとって、オンライン学活は、参加するハードルが下がり、その生徒の暮らしや考え方に変容が生まれることである。これまで学校や学級が前提にしてきた全員が一か所に集まって、同じことを同時に行うこととは異なる関わりが生まれる可能性があることが分かった。

第3に、オンライン学活は、これまで学校の持つ「居場所やつながり、安心感を持たせる意味」という機能を担ったことである。SNS等の私的なつながりだけでは、不十分だった機能を補完する公的なつながりとなったと考える。

5 到達点と課題

本研究の到達点は、オンライン教育における担任教師の役割が明らかになったことである。オンライン教育における学級担任の役割において、どのようなことが重要視されるか2点指摘できる。

第1に、オンライン学活の設定を行うことである。オンライン教育になると、生徒同士のつながりは、私的で、かつより限定的になった。その中で、孤立化した生徒もいた。生徒が困ったとされる「課題」や「友だちと関わり」について、困り感を解消するために、公的なつながりを保証する必要性が生まれた。

第2に、生徒の人間関係づくりを促進させることである。休校中、生徒の人間関係作りは難しい状況であった。オンライン教育で、生徒同士が「関わったことがある」関係を作り、不安を解消していく必要がある。これまでの学級担任の役割に加えて、公的な場で、お互いにつながる経験をすることで、ゆるやかな協同体づくりを進める役割が必要である。これは、沢津橋の言う「担任がモデレーターを担い、学校生活の中で、担任とのコミュニケ

ーションのみならず、生徒同士の横のつながりを促進させる役割」を担うことに通じている。

今後の課題は、進展するオンライン教育の中で、オンライン学活の実践を探ることである。また、オンライン教育と対面教育のハイブリット型の学級経営へと移行していく中で学級担任としてどのように人間関係作りを保証しながら学級経営を行うかである。そのために、オンライン学活の実践が生徒にどのような変容をもたらすのか検討する必要がある。

注

1) この時期、全国的にオンライン朝の会などが実施された。以下、オンライン学活と呼ぶ。

引用文献

- 沢津橋(2017)「【N高生のリアル】Slackで交わされる『オンラインホームルーム』とは」, <https://www.todaishimbun.org/nschool20170702/>(最終閲覧日2021年1月28日)
- 出口治明(2020)「リアル教育の価値と格差」,『月刊先端教育』2020年7月号, pp. 16-19.
- 苦野一徳(2020)「コロナショックで問われる『学校』『教師』の存在意義」, 東洋館出版(編),『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』, 東洋館出版, pp. 4-13.
- 中原淳(2020)「私が『オンライン授業』を実践した理由」, 東洋館出版(編),『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』, 東洋館出版, pp. 46-53.
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説(平成29年告示) 総則編』, 東山書房.
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校, 中学校, 高等学校 及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」, https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (最終閲覧日2021年1月28日)

The Role of the Classroom Teacher in Online Education: From the Research on the Classroom Relationships of Junior High School Students during Coronavirus (COVID-19).

Kodai SATO